



イエス団報

Jesus band news

2025/12/24

30

再刊 30 号

- 馬場一郎常務理事就任のご挨拶
- 村田哲康評議員退任のご挨拶
- 研修報告
- 施設紹介
かがわ子ども子育て支援センター育愛館
- イエス団の輪っ
上杉徹さん（理事）
下村寛子さん（桃陵乳児保育園）
布袋玲央さん（みなべ愛之園こども園）
田野里美さん（友愛幼稚園）
宮本幸美さん（神愛館）
- 人物探訪 近藤孝子さん
- トピックス
四貫島セツルメント・天使保育園
100周年記念
ぶどうの木保育園 50周年記念
カムチャツカ半島巨大地震津波警報発表
を受けて（みなべ愛之園こども園）
- 表紙写真的解説
- 新施設長就任紹介・編集後記

発行：2025年12月24日

発行者：神崎 清一

編集・発行：

社会福祉法人・学校法人 イエス団

〒651-0076

兵庫県神戸市中央区吾妻通 5-2-20

TEL : 078-221-9565

FAX : 078-221-9566

<https://jesusbond.jp>

mail to : honbu@jesusbond.jp



常務理事就任のご挨拶



馬場一郎（ばば いちろう）

- ・1958年8月19日生まれ
- ・同志社大学経済学部卒
- ・銀行、YMCAを経て
- ・2003年イエス団に入職
- ・現在、賀川記念館館長

「これからのお仕事」

私は2003年4月にイエス団に奉職し、今年23年目になります。そういうことで言えば転職してきた人間であり、そもそも社会福祉の仕事を生涯の仕事にしようと思っていたわけでもありません。そんな私がイエス団本部事務局に拾ってもらい、当時今井鎮雄理事長、村山盛嗣常務理事のもとで法人業務に携わさせていただいたことが、社会福祉の仕事としての最初になりました。

社会福祉の仕事の何たるかも何もわからない人間が、理事長、常務理事、各役員のみなさん、そして各施設長のみなさんと交わりを持たせていただいたことで、制度としての社会福祉事業ではなく、社会福祉をなぜ行うのかを含めた、イエス団の理念を学ぶことから入ってこれたことは、実際に事業を行っていく上で大変よかったです。

当時の法人本部は近藤孝子さんから川田公一さんに交代になった2年目であり、川田さんからも大きな影響を受けました。川田さんはさまざまなことが硬直した（私が勝手に思っていたことです）イエス団組織の根本的な土台から変えようとしていました。それこそ法人のガバナンス改革です。さまざまな改革案を当時の企画委員会（常勤役員の次の世代の施設長が委員でした）で積み上げ、理事会に提案していました。私は入ったばかりで何もわからず委員会に出席していましたが、企画委員のみなさんには法人を変えていこうとする熱気があったように感じました。そんな経験をしながら、法人業務を4年、その後現場に出させていただいて、保育園、こども園、児童館、障がい児通所事業、賀川記念館と仕事してきました。少しだけでも組織のことを知った上で、社会福祉事業に携われたこと、そしてその中でイエス団憲章を学び、ミッションステートメント2009を作り上げ、今に至っていることは本当にあります。

ノンクリスチヤンであった私ですが、前職場では聖書に触れる機会を多く持つことができていました。そして前職を退職した2003年イースターの日に受洗しました。45歳でした。当時、私は前職から意識してきた「いと小さきものに仕える」という

フレーズをイエス団憲章の中に見つけ、そういう仕事に関わることを喜びに思っていました。受洗し、「私は変わる」ということを自分に課して新しい世界に飛び込んだという思いを今も覚えています。

さて、そんな経験を積んで2025年7月から常務理事として働きさせていただくことになりました。意欲をもって手を挙げたわけではありませんが、今イエス団の役員や施設長の年齢を含め、これから法人運営を模索しなければならない時に、少しでも法人に恩返しができればと思ったことは確かです。中継ぎのような役割を思い、次につなげていくための土台を作れればと思っています。いつの時代も現在の方々は大きく見え、次を担おうとする方々は頼りなく見えるものです。でも次の方々がその役割と責任を自覚された時には、その力を存分に発揮してくれるものと確信しているところです。

イエス団という法人は、各施設が施設ごとにその歴史と設立者を持ち、その歴史の中で理念を持ち、自立してやってきた経緯があります。イエス団は全体としてガバナンスをしっかりと、各施設はその主体性の中で地域性を大切にして運営を継続しています。しかし、その強みは弱みにもなり得ます。法人としての全体の強さと、地域ごとにその働きを増していく柔軟性が必要なんだと思います。そのことを踏まえた上で法人と施設の協働と分担、そして責任の所在を考えていきたいと思います。最終的にはおそらく「人」であることは間違ひありません。

「人」が育ち、育てられる場をしっかりと設定していくことは重要であると思います。またキリスト教理解、クリスチヤンを育てることは避けて通れません。私たちが仕事をする意味、イエス団設立の意味を考え、各々が自分自身のことを振り返る必要があるのではないでしょうか。

もう一度繰り返しになりますが、次のイエス団を作るために尽力したい、イエス団がこの社会に必要であることを考えるとそれは大変やりがいのある仕事であります。微力な人間が、でも次の社会にイエス団がどうやって「いと小さきもの」を支えていくのか、「人」を育て、法人と施設が有機的に協働し、ミッションステートメント2009に書かれている社会をつくっていくためにできることをやっていきたいと思っています。みなさんの力強いご協力を願いします。

評議員退任のご挨拶

村田哲康（むらた てつやす）

- ・1948年9月19日生まれ
- ・四国学院大学文学部社会福祉学科卒
　フィリピンスクールオブ リーシャルワーク 修士課程修了
- ・聖隸ベトナム難民援護施設長を経て
　北陸学院・四国学院・聖隸クリストファー
　各大学で教鞭を執る。
- ・現在、日本キリスト教社会事業同盟顧問
　四国学院大学名誉教授



「イエス団に期待すること」

本年6月をもって、12年間務めた評議員を退任致しました。此の間、イエス団傘下の各施設で繰り広げられている働きが賀川精神を継承するものとして、慈しみと豊かな祝福の下に在ることを想い、感謝でした。

イエス団の働きが我が國のみならず、将来的には、アジア、アフリカ、中南米の国々にもプロジェクトを展開し、地元の人々と共に主のご栄光を現す働きがなされますよう、期待しています。

冗談は顔だけにしてくれと言う声が聞こえて来そうですが、真面目な話です。

その事を実現する為には、働き人の養成確保、財政面の裏付け、地元住民の理解等様々な準備が必要です。中でも、こうした計画に深い理解と情熱をもって、神と人に仕えることを喜びとして励む働き手が必要不可欠です。実践に励む使命、情熱並びに行動が原動力となっていかなければなりません。

世の多くの法人、施設にとっては容易ではないかも知れませんが、イエス団だからこそ、賀川精神に基づいて、この構想が実現できるように想うのです。

「Think Globally, Act Locally」

（ 地球規模で考え、足元から行動する ）。

此の言葉は、自分の生活する地域社会で具体的な行動を起こすことが大切であるという考え方を示しており、持続可能な社会を実現する為の、重要な指針とされています。

筆者は以前、静岡県浜松市に在る聖隸福祉事業団でベトナム難民援護事業に従事していました。事業団創設者長谷川保氏は、毎日早朝の祈りの中で、「僕は地球を背負って祈っているのだ」と語っておられました。その祈りは、目の前の人のことだけではなく、いつも世界中の人々のことにも及んでいました。

また、「一番大切で確実なことは、世の中が必要としている事を、全力を挙げて果敢に実行することだ」とも仰っています。

長谷川保氏は賀川豊彦氏と同志的関係性を深め、薰陶を受けながら、当時様々な困難な問題や課題に意欲的に取り組んで来られました。戦後の生活保護法の制定をはじめとする社会保障制度の実現に尽力されたことは画期的なことでした。

私達はこうした先人達の生き様に学び、従いつつ、世の変革者としての歩みを為して行くことが出来ればと想います。

寄稿に寄せて

香川県内で唯一の乳児院・豊島神愛館が賀川先生の誘いを受け、吉村静枝先生によって豊島に創設されました。時代が過ぎるにつれ、離島では社会的養護の働きには人的・物理的課題が多く、加えて建物の耐震問題も明らかになったことで、法人内でも豊島神愛館の香川本土の移転が何度も計画されては進まずにいました。そんな現状を憂えたのは当時、香川県内の社会的養護の体制を考える専門部会の委員長に就任されていた村田先生でした。四国学院大学で教鞭をとられる一方、香川県内で専門委員を委嘱されるなどの要職についておられた先生で、「豊島神愛館将来構想委員会」を立ち上げた際、お願いしてアドバイザーという立場で委員に加わっていただきました。多くの示唆に富むご意見をいただき、計画は大きく進み、2015年3月、かがわ子ども・子育てセンター竣工。豊島から乳児院・豊島神愛館、同じ坂出市内から保育園・坂出育愛館が移転し、現在に至っています。この過程の中で村田先生には大変お世話になりました。この度、評議員を退かれるに当たってぜひ後進へのメッセージをとお願いしました。

企画委員会委員長・黒田信雄

研修会報告



新任職員研修会

2025年3月24日（月）～25日（火）
於：神戸駅前研修センター

【目的】

- ①イエス団の理念を理解し、職員としての使命を考える。
- ②感じる、考える、気づく、聞く、分かち合うことの大切さを学ぶ。
- ③新しい職場に入していく準備をする。

【プログラム】

- 開会礼拝「イエスに倣って生きるとは」 説教：平田義理事
セッション1 「仲間との出会い、わたしに気づく」 5人とのペアトーク
セッション2 「グループの中でのわたしへの気づき」
コンセンサス実習「子どもの権利条約」
セッション3 「仲間との語らい」 不安や悩みの分かち合い
セッション4 「MS2009の実践～イエスに倣って生きる～」
キリスト教やイエス団、賀川豊彦に関する鼎談
(話し手：平田、田村、小野)
セッション5 「わたしの MS2025～働く私への気づき～」
現場で働くわたしをイメージして MSを作成
閉会礼拝「いつもあなたがたとともにいます」 奨励：神崎清一理事長

緊張した面持ちで会場にこられたみなさんでしたが、席の近くの人と自己紹介などを話す時間があったため、少しずつ表情が和らいできました。

はじめに開会礼拝をまもりました。礼拝では平田理事より、施設ではどこにも受け入れられない子どもを受け入れているという話を聞き、利用者や家族の為に自分にできることは何かを問いつづけること、社会の動きに対しアンテナを張り学びつづけることの大切さなどを教えていただきました。ミッションステートメント（以下 MS）でもしめされ、大切にされている「イエスに倣って生きる」ということば。すでに仕事に入られている方は特に「どういう意味なのか？」と思いつながら過ごしている人もおられたようですが、お話を聞く中で理解できたようでした。「神さまが一人ひとりを愛してくださいるように利用者に関わっていきたい。」という感想もありました。

そして、この研修でもうひとつの大切な目的は『仲間との分かち合い』です。セッションでは自分のことをいろいろな

角度から見つめなおすことをしていきました。そのために仲間との語らいは重要な役割をはたしています。人と話すことで見えていなかった自分の姿に気付くこともあります。また他人との考え方の違いに気付くこともあります、自分の話を聞いてもらい、共感してもらう心地よさを感じることもありました。入職にあたってや、働きだして少し不安に思っていることは、同じ思いを抱えた仲間と話すことで「いつしょだ」と感じたり、先輩職員フェローズから「わたしもそう思っていた。職場の仲間に助けられたよ。」と話を聞くことで安心につながったようです。



研修に参加されたみなさま。今、それぞれの職場でどのような働きをされていますか？

利用者と過ごす毎日が楽しい！と充実されている方もいれば、思っているとおりに行かなくてどうしようと悩んでいる方もいると思います。そんな時はみなさんが研修で最後に考えてかいた「わたしの MS2025」のカードを見てください。その時に思った新鮮な気持ちを思い出してみてください。そして一緒に語らった仲間のこととも思い出してください。みなさんの周りには職場の仲間がいます。

そして、法人の中を見渡せば一緒に研修を受けた仲間もいます。困ったときには必ず誰かにその思いを伝えてください。一人ひとりが大切にされている存在です。助けてくれる人が必ずいます。

これからもみなさんと一緒に周りにいる小さくされた人々に寄り添った支援ができればよいなと思います。

それぞれの職場で活躍されることを願っています。

報告：企画委員会 研修担当チーム
神視保育園 園長 植月優子

ブラッシュアップ研修会

2025年6月6日（金）～7日（土）
於：神戸市産業振興センター

2025年は、アジア太平洋戦争終結から80年の節目の年である。40年前の1985年、西ドイツ大統領ヴァイツゼッカーが行った歴史的演説「過去に目を閉ざす者は、結局のところ現在にも盲目となります」の言葉を、今あらためて深く胸に刻みたい。

今回のブラッシュアップ研修では、自らのミッションステートメント（以下MS）2025を明確にし、それを実行に移すことが一つの大きな目標となった。その第一歩として取り組んだのが、「これまでの自分を振り返る」という作業である。

なぜ自分は今の仕事に携わろうとしたのか。その時の気持ちや内なる声を思い出し、仕事の中で出会った人々や出来事が自分にどのような影響を与えたのかを見つめ直す。この振り返りは、あくまで個人の内省である。しかし、それを仲間と共有することこそ、より深い意味がある。

自分の思いを言語化し、自分なりの言葉で伝える。もちろん、誰もがそれを得意としているわけではない。グループで思いを共有する経験がない人、言葉にして人前で語ることが苦手な人もいるだろう。それでも、伝えられるかどうかが問題なのではない。その場に「在る」こと、時間を共にするこそが大切なのだ。たとえば、自分の思いをうまく話せなかっただとしても、他者の言葉を通して「ああ、そうそう、私が言いたかったのはこれだ」と気づくことがある。また、「そんな考え方もあるのか」と、自分とは異なる視点に触れることで、新たな気づきが生まれる。

こうした思いの共有と積み重ねの中で、これまで知らなかった自分自身の感情に出会うこともある。そこには正解も間違いもない。それぞれの意見は、どれも等しく価値がある。まさにポリフォニー（多声性）であり、一人ひとりがその人らしく尊重される社会の姿である。



しかし、世界ではそのような社会とは真逆の状況が今まさに起こっている。

イエス団が掲げるMS2009が目指す「平和をつくりだす」とは対照的にガザでは無差別かつ計画的な殺害行為がおこなわれている。パレスチナ自治区ガザやヨルダン川西岸に関する情報は溢れているが、それが正しく伝えられているかどうかは別問題である。

ただ、これだけは明確に言える。「多くの子どもたちが殺されなければならない理由など、決して存在しない」。この行為に異を唱えないことは、すなわちその行為を容認することと同義である。

大手メディアが流す情報の中で、根本的に誤っている点がある。それは「ハマス＝テロ組織」という単純化された図式

だ。私たちはオウム事件以降、「テロ」という言葉を聞く思考が停止する。テロ組織は正義の名のもとに殲滅すべき存在とされる。しかし、ハマスは単なるテロ組織ではない。

現在の状況は、2023年10月にハマスがイスラエルに奇襲攻撃を仕掛けたことから始まったわけではない。

1967年以降、イスラエルによる軍事占領が続き、国連決議による撤退要求も無視されてきた。ガザでは2007年から完全封鎖が続き、経済基盤は破壊され、「天井のない監獄」と呼ばれる状況が常態化している。もはや監獄ではなく、「処刑場」と化していると言っても過言ではない。

国際社会は、このような状況を60年近く傍観し続けてきた。ハマスは、その中で祖国を解放するために立ち上がりざるを得なかった存在である。停戦提案をハマスが拒否していると報じられるが、その内容に「1967年以前の状態に戻す」という根本的な解決策が含まれていないことは、何を意味するのか。

MS2009は、ガザにおいては絵空事なのか。何ができるのか。何をすべきなのか。すぐに答えは出ない。しかし、何かできることができがきっとある。いや、あるはずだ。始められることが。あらためて問い合わせたい。私たちの目の前にいる子どもや高齢者、障害のある人たちと、ガザにいる子どもたち、高齢者、障害のある人たち。その間に、何が、どう違うのか。

報告：企画委員会 研修担当チーム
京都市南部障がい者地域生活支援センターあいりん
太田正人

全体主任会

2025年7月4日（金）
於：賀川記念館

2025年7月4日にイエス団全体主任会が賀川記念館で行われました。今年度は講師に前常務理事の高田裕之先生をお招きし、「いま おもうこと」と題してご講演いただきました。

高田先生の幼稚園時代のキリスト教との出会い、大学でキャンプに出会い4年生の時に洗礼を受けたお話、イエス団に来てからのことなど、これまでの様々なお話をしてくださいました。



聖書や“イエスに倣って生きる”的お話の中では、イエスが生きた状況に触れるのが聖書であり、イエスの生き方が残っているのであれば、生きていく上での在り方を示している聖書に、毎日ではなくても触れる機会があった方がいいとおっしゃっていました。

聖書は読むたびに受け取る気持ちや状況が変わってくるもので、若い時と今で違う印象がでてくるのが聖書であり、その時代を生きた人達が残したものだからこそ重さを感じるというお話を心に残っています。

また、聖書の切り取った一箇所だけを読み、響くものがある、それでいいのではないかという言葉が印象的で、その時々で自分に必要なことを聖書は教えてくれているように感じました。

聖書の一節、ルカによる福音書 17 章 21 節（新約 143 頁）『神の国はあなたがたの間にあるのだ。』から、私たちの間に天国はあるのか、職員間にも天国をつくることができているのかという問い合わせがありました。

職員間の雰囲気は子ども達にも表れるもの。色々な背景の人が共に仕事をするのだから、ルールが大切であり、共通の認識を持ち、同じ解釈でいられる枠組みができているかが重要になる。また、お互いに存在を認め一緒に生きる、そして協力する関係性になること。それが職場にも職員間にも天国をつくることであるというお話に、自分達の今を考え、これからのことともたくさん想像しました。



高田先生のお話にたくさんの学びを感じる中、とても心に残っているのが、自分の言葉で語ることの大切さ、私たちはその努力をしていかないといけないとおっしゃっていたことです。私自身、自分の言葉で話し伝える難しさを感じていたので、とても心に響きました。

また、主任の仕事をする中で苦しいこともあるけれど、同じものは一生続かない、雲の上にはいつも太陽があるというように、どんなにしんどくても辛いことがあっても、必ずどこかで変わり目はある。毎日同じようにしているようでも変わってくる、という言葉に励まされる思いでした。

講演後の分かち合いの時間では、天国屋カフェのおいしいデザートをいただきながら、グループごとに様々な話ができたことに感謝します。高田先生のお話から感じたことや学んだことの共有、主任同士だからこそ話せる悩みや困りごとの話、そして施設同士の情報共有など、話は多岐に渡り、とても有意義な時間となりました。

今回の全体主任会を通して、同じ立場に立つ仲間の存在に励まされ、これからに繋がる前向きな気持ちになりました。

そして、高田先生にいただいたお話をこれからの糧として、毎日に向き合っていきたいと思います。

報告：杉の子保育園　主任　大角知香

リーダーシップ養成研修会ステップⅠ

2025年9月11日（木）～13日（土）

座学：在日韓国基督教会館（KCC）

フィールドワーク：生野の街

社会福祉法人愛信福祉会 愛信保育園

社会福祉法人聖和共働福祉会 大阪聖和保育園

NPO法人サンボラム在日コリアン高齢者支援センター大池橋サンボラム

NPO法人うり・そだん デイサービスさらんばん

NPO法人出発（たびだち）のなかまの会

研修の目的

MS2009 の実現に向けて必要なリーダーシップの能力を高める

地域／社会を捉えるまなざし

ニーズを確かめる

事業をつくって動かす

今年の夏も様々な感染症の不安が絶えない中でも、研修を快く受け入れてくださった愛信保育園、大阪聖和保育園、サンボラム、さらんばん、出発の仲間の会の皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

研修参加者は9名（1名早退）でした。多くの職員を送り出して下さいました各施設にも感謝です。

2025年7月に参議院選挙がありました。特に、参議院選挙で外国人排外主義が選挙の争点になりました。選挙権のある私たちの姿勢を問われることもあり、個人的にいつも以上に緊張を持って研修に参加しました。

例年通り、吳光現氏に生野地域（御幸通商店街・鶴橋国際マーケット）のフィールドワークをしていただきました。ここでは、日本と朝鮮半島の友好的な深いつながりがある歴史を学ぶ一方、座学では排外主義が広がる日本社会へ警鐘を鳴らすお話しがありました。



吳光現氏と受講生

参加者の多くは、在日朝鮮・韓国の方々の歴史を知らなかつたです。植民地支配があつた歴史。近年のヘイトスピーチの実状。ヘイトスピーチを受けた方々の心の傷の大きさ。また、参議院選挙で「日本人ファースト」と連呼されることで、在日朝鮮・韓国人は日本に居られるのか、いつか攻撃されるのではという恐怖。マジョリティーの側にいる私たち日本人が、マイノリティーの方々を住みにくい日本に追いやっている現状を知れば知るほど、知らなかつたでは済まされないことに気付かされた参加者が多くいました。

例年イエス団報で研修報告としてお伝えいますが、呉光現氏や在日二世の李承子氏の生のお話し、まちの空気、伝統的な食べ物の味を体験することが、言葉以上の理解を深めることができます。

また、沖縄の平和運動をされていた阿波根昌鴻氏が言っていた「平和の最大の敵は無関心である」を肌身に感じる研修となり、これが出来るのがイエス団の研修の良さといつも感じます。

2日目は生野の地域課題を、自らの課題として施設運営されている方々の現場研修。私たちイエス団としてもミッションステートメント2009の実践につながる学びとなりました。

この出会いの中で、参加者の多くは初めて知ることばかりで、今までなぜ知らなかったのか、なぜ知ろうとしなかったのかを悔いる参加者もいました。

リーダーシップ研修ステップIの目的は、各々の地域・施設利用者の困っていることを自ら気付き、どのように解決に向かっていけるのか、を考える研修です。12月のフォローアップ研修では、参加者それぞれが地域の現状、社会資源などを調べ、アクションプランを作成します。



そこで出来上がったアクションプランは参加者だけで実行できません。参加者のあった施設は、出来上がったアクションプランを施設のMS2009実践の一つとして一緒に実行していただきたいです。

アクションプランを実行すると、プラン変更が必要になるでしょう。プランを修正し実行する、これをやり続けることがMS2009にある「社会をつくりだす」ことだと思います。MS2009の実現をみんなでやっていきましょう。

以下に参加者のアンケートをほんの一部ですが記載します。今後参加を予定されている職員のみなさんの参考になればと思います。

- ◎ 差別ということに対して改めて考えたいと思いました。まずは知ることから。色々なことにアンテナを向けていきたいです。勉強できるうちに勉強していきたいです。他の園の方の話を聞くことが色々と刺激になりました。文句を言うだけではなく、もっと自分でやり方を変えながらいろんなことに挑戦していこうと思いました。
- ◎ 自分にできること、何をするべきなのかを考えることができた。まだまだ自分の力のなさに気づき悔しくなりました。これを糧に自分の力を最大限に活かしていきたいなと感じました。

◎ 『知らないことは怖い』という言葉がとても印象的で、知つていれば防ぐことができても、知らないから傷付けてしまうことが世の中には多くあるのだろうと思いました。そして自分自身もその1人になってしまふことがあると考えると怖いなと感じました。いろいろなことに興味を持ち、知ろうとすることを大切にしたいです。

◎ 今回学んだことが、どのように「日々の実践」に繋げることができるのかを考えていきたいと思いました。今回の研修は理念研修に近いと理解していますが、「理念」と「実践」がどう結びつけることができるのかを考えたいと思います。

報告：企画委員会 研修担当チーム
野の百合保育園 園長 井桁光

2025年度の研修を振り返って

新任職員研修会から始まり、ブラッシュアップ研修会、全体主任会、リーダーシップ養成研修会ステップIと、駆け抜けたこの2025年も、どれほど多くの方々との出会いがあったことでしょう。

イエス団に入職し、初めてキリスト教と出会った方々や、既にそれぞれの場で活躍され、キリスト教と出会っておられる方々と共に礼拝を守り、イエス団のMS2009の実践、そして、キリスト教社会福祉について考えました。そこでわたしたちは、「イエスに倣って生きるとは」「どのようなイエスに倣うのか」と問いかけられました。

一人ひとり、与えられているものも役割も違いますが、それぞれの現場で実践するためには、わたしたちもまた愛されているのだということを心に留め、「隣人を自分のように愛しなさい」というみ言葉のように、自分と同じくらい関わりのある方々を大切にすればと、わたしは思います。

人の関わりの中で、思うようにいかない事、迷うことはたくさんあります。それでも前に進まないといけない時に、わたしたちの傍には必ずイエスさまがいてくださいます。だからこそ、今ここに送ってくださった神さまに感謝しながら歩んでいくのです。

「—うろたえてはならない。おののいてはならない。あなたがどこに行ってもあなたの神、主は共にいる。」

ヨシュア記1章9節（旧約340頁）

どうか、皆さまが自分を好きで、関わりのある全ての方々と共に、いきいきと働いてくださっていることをスタッフ一同願っています。

企画委員会 研修担当チーム
チーフ 田村三佳子

研修報告特別編

沖縄平和研修

ぶどうの木保育園の年長児による「沖縄平和キャンプ」が2005年から始まりました。その学びが職員研修会へと発展して続けられ、今年は雲柱社から7名イエス団から3名の参加がありました。人間の愚かさや悍ましさ、苦しみ、そして人々の逞しさや力強さ暖かさを言葉では言い表せない程感じました。それぞれが学び、得たことをまとめた報告書の中から一部を紹介します。平和についてみんなで考える機会になればと思います。

研修で手にした「不屈」の言葉を縁に沖縄研修へ参加しました。初めて訪れた伊江島では、激しい戦禍と人々の苦しみ、そして非暴力で土地返還を求め続けた島民の強さに胸を打たれた。不屈館で瀬川次郎らの歩みに触れ、平和を守る責任は自分にあると実感した。歴史を学び続け、今起きていることに目を向け、伝え続けること。そして意思表示として選挙に行くことが、私にできる平和への一歩だと感じた。

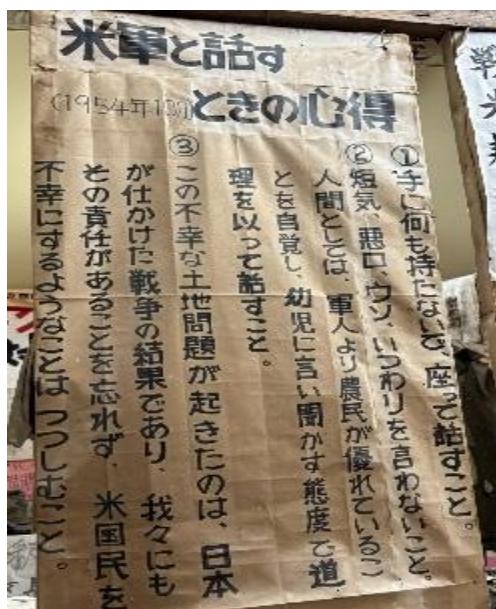
(神視保育園 中村 葉)

沖縄研修に不安を抱えて参加したが、飛行機から見た美しい海に心が和んだ。阿波根昌鴻写真展や対馬丸記念館で戦争の悲惨さを知り、平和の尊さを深く感じた。映画「対馬丸」での記憶が繋がり、命の重みを実感。平和行進では”自分にできること”を考えながら歩き、沖縄の自然と県民の思いを守りたいと感じた。

(くずは光の子保育園 島田 佳奈)

沖縄研修で、戦後も米軍に土地を奪われ飢えに苦しむながら、武力ではなく言葉・旗揚げ・座り込みなど非暴力で闘い続けた農民の強さに深く心を動かされた。彼らは「米軍と話す心得」を守り、すべての人が救われる平和を目指して行動した。辺野古では日本人が基地建設に関わる現実に疑問を抱き、本心と異なる人々が救われるよう願った。現地の声は何より重く、平和を伝え続ける人になりたいと強く感じた。

(くずは光の子保育園 石山 陽菜)



米軍と話すときの心得 (1954年)

伊江島 わびあいの里 反戦平和資料館掲示



神視保育園の中村葉さんが研修に参加して心に残ったことを4コマ漫画にされているのをご提供いただきました。

施設紹介

かがわ子ども子育て支援センター 育愛館

〒762-0056 香川県坂出市中央町8番58号
TEL: 0877-46-5812 FAX: 0877-44-3463



四国の玄関口とよばれる『香川県坂出市』。瀬戸内海にうかぶ大小さまざまな美しい島に見入っていると、あっという間に瀬戸大橋を渡ります。そこが、『育愛館』の子どもたちが育つ街です。海が近く、緑地帯や公園がたくさんある、高齢者や子育て世代にやさしい街といえます。

今から88年前の1937年、吉村静江氏が育愛館の前身となる託児所「坂出善隣館」を創立。当時、塩田で重労働を課せられていた保護者と背中に背負われる子どもを守るために、まさに地域福祉を目指すセツルメントを実践されました。

1954年、社会福祉法人イエス団に加盟の際には、名称を「坂出育愛館」と改め、乳幼児の保育の充実を目指すだけでなく、安全に出産ができるようにと助産院も開かれました。

1965年には、保育園と助産院を併設した、鉄筋コンクリート5階建の園舎を新築。

当時、坂出の街にはこのような高さの建物はほとんどなく、坂出のどこからも育愛館が望めたということです。

その後、2度の大規模改修を行なながら、歴史の詰まった近代的な園舎を守ってきましたが、現在の建築基準を満たすことができず、2015年「坂出育愛館」を閉館し、「かがわ子ども子育て支援センター育愛館」として坂出市中央町に移転。

神愛館(乳児院)、友愛館(地域支援センター)と手をとり合って、~笑顔いっぱいの坂出~をイメージしながら協働する毎日です。

[春] ~みんな違っているからだーい好き~春は新しい友だとの出会いがあります。のびのびと遊ぶ中で、自分の思いを通してけんかになることもしばしば。そんな経験を大切にしていると、仲直りできた時の喜びもしっかり感じられるようになります。友だちにも思いがあって、自分にも思いがあって…。



どこかで折り合いがつけられるようになった時、「みんな違っているから楽しいな。」とそれぞれに感じてくれているようです。そんな体験を重ねるため、春はとにかく園庭や公園での遊びをいっぱい楽しめます。



[夏] ~いのちはかけがえのないもの。平和ってなあに?~3歳以上児クラスの8月は、戦争や平和、いのちについてお話を聴いたり、自分の思いを伝えたりします。まだまだ十分

ではありませんが、保育者は子どもたちの心に響け!届け!とばかりに、試行錯誤しながら取り組んでいます。



[秋] ~豊かな自然に感謝~園庭に育つ1本のどんぐりの木。枯れかけては新しい芽が出る…の繰り返しだが、やっとたくさんの実をつけてくれるようになりました。子どもたちは、どんぐりが色づいていく様子を見て、秋の訪れと深まりを感じているようです。つやつやした茶色のどんぐりになあれ!と首を長くして待つ子どもたちです。そのほか、公園での花植えや収穫感謝礼拝とクッキング…、祖父母さまの畠から届けられる様々な野菜や果物…、秋は神様からの贈り物に感謝する豊かな毎日です



[冬] ~隣人と共に生きる 繋がりを大切に~ 素敵な衣装に身を包み、うれしい気持ちでイエス様のお誕生をお祝いするページント。この衣装は有志の保護者の方々が縫ってくださいました。10年、大切に使わせていただいています。



また、3月にはお世話になっている老人会や自治会の方をお迎えして、年長児との交流会をもちます。「今まであ



りがとう。これからもよろしく。」の気持ちを込めて、小学生になる喜びを伝えます。私からは、「登下校の際にはどうぞ声をかけてやってください。どうぞ見守ってあげてください。」とお願いをします。

育愛館は今、職員一同、創設者吉村先生の歩みについて学び、その想いに沿った働きが現在もできているか精査する毎日です。セツルメントを理解し、真の意味で坂出に必要とされる「育愛館」でありたいと願いながら…。

施設長 藤澤孝子

イエス団の輪っ



社会福祉法人イエス団理事

社会福祉法人 神戸真生塾理事長 上杉 徹さん
「子どもと若者世代の未来が輝くように」

子どもと若者世代の受難の時代が続いている。

今年3月にこども家庭庁より発表された児童相談所への児童虐待の相談件数は過去最多の225,509件と4年連続で20万件を超える。少子化の時代の中で子育てに悩み、苦しむ保護者は増加傾向にあります。特に、企業が産休・育休を充実させ、幼い子どもと共に過ごす時間を持つ様にと環境整備を進めているにも関わらず、「アウェイ育児・ワンオペ育児」などの言葉の通り、子育て支援拠点等でアンケートを取ると「子育てに悩んでいる保護者」の数が約6割となっています。60代以上の世代の方が聞くと「保護者が乳児期に子どもと過ごせることは素敵なことである。」と思いがちですが、むしろ、共に過ごすことによってお互いが苦しい状況となっています。子育て家庭において何が起きているのでしょうか。

この数年、政府は「こども家庭庁」を創設して『こどもまんなか』と言い始めました。しかし、家族関係や人間関係が解体されている時代の中で、なかなか『こどもまんなか』とならない状況が続いております。子どもを取り巻く環境では「児童虐待」「いじめ」「不登校」により小中高生の自殺数も500名を超える高止まりとなり、『子どもとユース世代の受難の時代』が続いております。また、コロナ以降においては若年層だけではなく、女性の自殺者数が増加しています。今の時代、家族が共に過ごす時間が辛いと感じる人が増えているようです。子どもと若者が生き辛い環境の中、安全安心の中で過ごす居場所がなく、孤独・孤立している子どもが置き去りにされています。健全な居場所、健全な大人との出会いの場所が失われつつある今の時代に賀川豊彦先生が生きていたら、何を行っていたでしょうか。

今の時代、イエス団も神戸真生塾も子どもたちを通した家庭への支援に向き合っています。そして、昨今は、この夏の参議院選挙から始まり、日本に来て生活する外国籍の方々への誹謗中傷が増え、不穏な空気感に包まれた時代となっています。その中でも先駆けて賀川記念館はじめ神戸市長田区の神視保育園では外国籍の小・中学生や保護者への「日本語教室」を通して支援を行っています。私は「施設で生活する子どもは誰一人望んで施設に来ていない。」

という現実の中で、「外国籍の子どもたちは誰一人望んでこの国に来ていない」という現実を見た時に、おのずと次なる我々の課題は「外国籍の子どもと家族の支援」となると考えています。

イエス団の活動と神戸真生塾の活動が連携することで、子どもたちの未来が変わる可能性を感じております。

4年前より神戸真生塾の子どもたちが春休み、夏休みに神視保育園にて「保育体験」を受け入れていただいております。保育士になりたい、興味があるという子どもが5日間ほど保育教諭体験をさせていただき、そこから保育士養成校へと進学した例もあります。この活動は保育園以外にも「企業訪問」と題して様々な業種で行っています。

企業訪問の報告会では植月園長はじめ様々な受け入れ企業の社長の方々も集まり、子どもたちの体験発表を聞き、体験中の子どもたちの様子をたくさんのお褒めの言葉で語っていただいております。この様な活動が施設の子どもだけでなく、一般家庭で生活する子どもたち、特に、逆境体験下で生活している子どもたちや外国籍の子どもたちへと拡がっていくことを願います。「だから、わたしたちは落胆しません。」(コリントの信徒への手紙二4章16節)の聖句に背中を押されつつ、子どもと若者の未来のためにイエス団と共に歩んでいきたいと願います。

次の「イエス団の輪っ」は、山ノ井景子理事にバトンタッチします。



京都ブロック 桃陵乳児保育園 下村 寛子さん

「節目に」

この度、野の百合保育園からバトンを受け取りました桃陵乳児保育園の下村寛子です。

今年、私は社会人として40年目を迎えます。ひと言ではまとめることはできませんが、様々な事に出会いたくさんの人と交わり過ごすことが出来た事を振り返り感謝の思いです。

私が保育園と出会ったのは子どものときです。園児としてお世話になり、縁あって社会人としてもお世話になることになりました。保育士として保育園に勤めるようになつた頃はとにかく嬉しすぎて舞い上がり、毎日が日々楽しくて物事を深く捉え考える姿勢もなく過ごし、あの頃の自分を思い返すと、本当に恥ずかしい限りです。

一年目、0歳児クラスの担任となり、二年目も同じ0歳児の担任となりました。“去年の経験の上に積み上げていこう”と心に思いスタートしました。おこがましいのですが、0歳児保育を経験している安心感みたいなものを感じていたように思います。新しく出会った子どもたちとの毎日も楽しく浮かれてしまっていたのですが、チーフの先生や保育士集団が変り、昨年の0歳児保育と異なると感じる事が私の中で戸惑いとなり、「何故違うのか一緒にないといけないのでないのではないか」と心の中で、もやもやしたものとなり膨らんで悩みとなりました。みんな同じでないといけないものだと強く思っていたのです。

会議やチームで話し合うことは大切にしていましたが、自分の中のものやもやを整理できていなかったので会議で発信することもできず。自分の中で何か引っかかっているものを感じながら毎日が過ぎていきました。

そんな思いとは裏腹に、子どもたちは日に日に保育園を安心できる場と受け入れてくれるようになり、友だちや保育者と共に過ごす毎日をゆったりと楽しみ、自分の思いをそれぞれの表し方で表現し伝えてくれて、満たされた時は喜びあふれた笑顔を見せてくれるようになりました。生きる力が日々の生活の中で溢れるようになり、活き活きとした姿に子どもたちが安心して過ごせる場となることが大事であること、子どもたちも一人ひとり違うのだから保育も色々あっていいんだということを子どもたちの姿から気づき、今までの言い表せない思いが柔らかくなっています。そのことを園長先生との面談で伝えると、「よく気がついたね」と言ってもらえたことを昨日のことのように思い出します。「私もまた受け止めてもらっている、そのことなんだ」と感じ、隣りにいてもらえる安心感で嬉しかったことを思い出します。

これまで歩んできた毎日をふと振り返るとたくさんの社会の変化がありました。“保母”から“保育士”へと変わったこと、週休二日制となったこと、専門性を高めることで少しずつですが労働条件が改善されていること……これからも社会の流れはとどまることなく変化していくと思います。考え方、捉え方、価値が多様化して選択肢がたくさんあって嬉しい事もあるけど、時には迷い悩む事なることもあります。

2009年に「ミッションステートメント」がつくられそれを目にしたとき、心に何かしら深く刺さるものを感じたことを思い出します。自園の総主題は「共に生き共に育つ」～平和を見つめて～です。どんなに社会が変化しても人が大切にされなければならない事は変わらないし、そのためにも人と関わり、相手を知ることを大切にして、それを心の深いところで覚えて過ごしたいと思います。

先日30年前頃に出会った保護者の方とばったり会うことがありました。記憶が不確かだったのでお互い直ぐには声かけられず。そろへりと「もしかして30年前頃におられましたか?」と聞いてくださり、そこから嬉しい再会に話が弾み「先生は水無月がお好きだと言っておられましたよね」と。今も好きなのですが、そんなことまで覚えてくださっていてびっくりすると共に嬉しくなりました。離れていても繋がるのが心なんだな~と、この歳になって改めて思いました。うれしい関係だけでなく辛い関係性の事もあるけれど時間が柔らかくしてくれるようにも思います。

子どもたちと共に過ごしておられる先生方のことを心より応援しています。心も身体も元気に歩んでこれたことを神様に感謝してこれからも、ゆっくり自分らしく前を向いていきたいです。

「気づく」

人は気づくことが大事だ 教えられて覚えることと
「そうか」と自分で気づいてわかったことは全然違う
教えられたことは 頭で覚えたこと
気づいてわかったことは 体験を通して身についたこと
頭で覚えたことは知識 気づいて身についたことは
自分を動かしてくれる力だ 生きる力を助けてくれる力だ

次号は空の鳥幼稚園にバトンを渡したいと思います。



大阪ブロック みなべ愛之園こども園 布袋 玲央さん
「イエス団の一員として学んだこと」

この度、ガーデンエルさんよりバトンを受け取りました、みなべ愛之園こども園の布袋玲央です。私がイエス団の一員になった頃の愛之園は定員60名、職員は15名という規模の保育園でした。現在は公立の保育所、幼稚園、民間の保育所、合わせて4つの園が合併して高台に移転しました。近くには県下トップクラスの備蓄倉庫も整備され、町の避難所としての役割も担っています。現在は認可定員160名、利用定員145名、正職員24名、非常勤職員14名、子育て支援の正職員1名、非常勤4名の体制で運営しています。

こども園になる前の保育園時代の愛之園では月に一度の職員会議の中で『聖書に聞く』を聖書とともに職員全員で読み込み、気持ちを新たにしていました。こども園になってからは園児も職員も増え、それに伴う連絡事項や確認作業が多くなり、聖書を開いたり、読み合わせをしたりという時間がなかなかとれなくなっています。仕方のない事ですが残念です。

さて、イエス団と自分との繋がりを思い返してみると、私は新任研修、ブラッシュアップ研修、リーダーシップ研修と参加させていただきましたが、どの研修も楽しく達成感がありました。前回の研修で一緒に学んだメンバーがまた今回も参加しているかを確認して声を掛け合うのも恒例でした。研修の終わりには帰るのが寂しくなるほど充実していたと思います。

そして、研修の中で強く印象に残ったのは吳光現さんによる『共生・共存？生野・イカイノ朝鮮市場からのメッセージ』です。資料を基に在日の街としての生野地域の形成と今をたどりながら知らなかった歴史に触れました。その中でも在日二世のチョン・ギミさんが学校の先生になりたいという夢を語った時、担任の先生に国籍条項があるから朝鮮人は先生になれないと聞かされる場面が最も印象的です。全てを悟って「なんでですか」とも言えずに立ち去ったチョン・ギミさんの絶望感が胸に突き刺されました。

また、どんな性の在り方も排除されないクラス、園、職場とは?がテーマとなった研修ではセクシャルマイノリティーコどもたちの居場所づくりに取り組む田中一歩さんと近藤孝子さんの「多様性を認める社会を考える」をテーマにした講演会に参加させていただきました。

その中で男の子と思われる子の替えの下着がピンク色しかない時に「今日はピンクのパンツしかなくてごめんな」と言うのではなく、「今日は選ぶパンツがなくてごめんな」と言うということを教えていただき、自分の無意識の決めつけに気付かされました。また、男の子こっち、女の子こっちで並ばせる。恋愛感情があって当たり前。それが多数でみんなそうと思っていた。セクシャルマイノリティーと言わされたい子どもは一人もいない。否定的な意見が大多数だと自分の意見や知っていることなどを言うことすらできない。子どもは我慢強い。言えずに誰かが声をかけてくれるのをじっと待っている。この人だったらちゃんと話を聞いてくれると思わないと辛いことがあっても言ってくれない。保育園の時期が大切。自分も誰かを否定しない。排除

しない。みんな仲良くはできなくても一人ぼっちにならないように。職場も誰かを一人にしない。そして性は自分自身が決めることであること。普通なんて性はないということ。性に関わる言葉は無数にあるということ。その全ての生き方、全ての人に対して、そのままで大丈夫！と伝えていこうと思いました。

そして、この研修会にはもうひとつの大切なエピソードがありました。講師の近藤孝子さん（コンちゃん）が5歳児を受け持っていたときのことでした。口調の粗さから、ついつい「こわい子」と決めつけられていたYがいました。子どもたち同士の決めつけにYは悔しさを感じていましたが、子どもたちだけでなく実はおとなの中にもYへの決めつけがありました。ある日、ベテランの保育士が園庭に落ちていた棒を拾って歩いているYを見かけます。そしてYに「またそんな物持って！」と怒ったそうです。事務所にいたコンちゃんのところにやってきたYは「ぼくは何もしていないのにすごくいややった」と話しました。すごく悔しそうに話すYに、コンちゃんは「私が一緒に言いにいこか？」と言って、Yと一緒にベテランの保育士のところに行きました。その時の僕（田中一歩さん）は、コンちゃんが「子どもの気持ちを、そして人権を大切にしている保育士になってる！」と思いました。でも、僕（田中一歩さん）は、子どもの気持ちより、「自分がベテランの先生にどう思われるか」ということの方が気になっている自分に気が付きました。そこまで子どもの側に立ちきるコンちゃんの保育をすごいと思いました。そして「あなたの保育が素敵やなと思っている」「あなたのような保育士になりたいと思っている」ということを素直に彼女に伝えました。と、あります。そしてその後、5年生の時から誰にも言えなかつた自分のセクシュアリティについても自然にコンちゃんに話していくのです。自分のことを否定されない、排除されないと思える人には自分の事を話したいと思えるのだと感じました。しかし、ベテランの保育士や上司に意見をするというのは難しいものです。今後の自分の立ち位置がおかしくなるのではないかという怖さもあります。それでも子どもたちのために行動できるようになりたいと思いました。

そして、個人的に最も印象が強かったのはみどり野保育園の園長、中田一夫先生との出会いです。元町のバーや居酒屋でサシ飲みさせていただき、私が間違ったことを言うと「お前！それは違うぞ！」と怒られました。私は和歌山に妻子のある身でしたので冗談だったかと思いますが、「神戸に来い」「俺の家に来い」と言っていただきました。

また、賀川豊彦献身110周年イエス団大集会で各施設がプロジェクトを使って活動報告をしている中、私はマイク一本で壇上に上がりました。その時『王さまと王さま』という絵本のことを思い出し、「違いを認め合えれば争いもなくなるんですよ。だから僕はミッションステートメント2009の中で【わたしたちは違いを認め合える社会を作り出す】という宣言が特に大切だと思っています。ありがとうございました！」と言って舞台を降りました。その時、舞台袖で平田理事に「お前の演説が一番良かった」と言ってもらえたのが今でも私の大切な思い出です。

いつかまたイエス団の仲間たちとお会いできる日を楽しみに業務に励みたいと思います。次回は、馬見労癒保育園さんにバトンをお渡しさせていただきます。よろしくお願ひします。



兵庫・東兵庫ブロック 友愛幼稚園 田野 里美さん

「いま、出来ることってなに？」

この度、杉の子保育園さんよりバトンを受け取りました。友愛幼稚園の田野里美です。このお話をいただいた時「今のわたしがお話したいことって何かな？」と考え、真っ先に思いついたことを…。

20年以上前に2年間友愛でお世話になり、その後保育以外の仕事も経験したのち、またご縁があり前園長に声をかけていただいて再び友愛に戻ってきました。仕事、子育て、親の介護…と走り抜けてきたこの14年。

年齢を重ねるうちに次第に足の痛みを感じるようになり、病院で検査をしました。主治医の先生から言われた衝撃の言葉は「このままいくとそのうち歩けなくなるよ。」でした。

《我慢したら仕事出来るわ。痛くてもまだ動けてるし。》と思っていた私。…それから10年経っていよいよその時がきました。朝、起きようとしたら痛みで起き上がりがれない！緊急事態です。歩けなくなる日がこんな急に来るなんて…。歩くだけでも大変なので、子どもが泣いていても抱っこ出来ない。子ども達と体を動かして遊べない。立ち座りがスマーズに出来ない。ということは…大事な子どもたちの命を守ることが出来ない。《そうか。歩けなくなるということはこういう事か。》痛感した時にはもう遅い。そしてこの夏、大きな手術を受けました。

今まで出来ていた事が難しくなりました。例えば、どちらの足から動かせば段差を越えられる？靴下はどうやったら履ける？落ちた物はどうやったら捨てる？一つ一つ立ち止まって考えなければ動けません。同じ手術をした人の中でも私は特に回復が遅いそうです。思うように動かない体に、引かない痛みに焦って何度も落ち込み、その度に《個人差があるからゆっくりで大丈夫。》と主治医の先生方やリハビリの先生に励ましてここまできました。

私はこれまでイエス団の一員としてリーダーシップ研修や主任会を通してたくさんの尊敬できる先生方に出会い勉強させていただき、MS2009も以前とは見方や考え方も変わってきました。また小学校や中学校、地域の方々と関わる活動をさせていただくことで、地域の課題などについても知る機会をいただきました。

今の私はまだ誰かに助けてもらわないと出来ないことがたくさんあります。園の先生たちにはたくさん負担をかけています。助けてもらっている分、いつか返せる日が来るのかな。当たり前に出来ていた事ができなくなって気付いたこと、見えてきたことがあります。隣人と共に生きる社会って？違いを認め合える社会って？自分の感じたことを周りの人に発信できる事が、今の自分に出来ることなのではないかと思います。助けてくれる周りの人たちに感謝の気持ちを忘れずに。

次回はのぞみ保育園さんにバトンを繋がせていただきたいと思います。よろしくお願ひいたします。





四国ブロック 神愛館 営本 幸美さん

「島の歴史とともに」

十年を一昔というならば、この話は、七昔半ほど前の話になるのでしょうか。

「赤ちゃんがようけおって（たくさんいて）めずらしいから見に行かんか（行こう）。」

小学校の低学年だったか、一人の女の子が仲の良い友達二人と連れ立って訪れたところは、何とか雨風がしのげるであろうという風のトタン屋根の家でした。

中には棚の上にたくさんの扉がついた柵があり、扉を開けるとどの扉の中にもかわいらしい赤ちゃんが寝ていました。ひとつづつ扉を開けて一人出してはミルクを飲ませ、飲み終えると戻して、また次の扉を開けて、の繰り返しです。女の子はどうしてこんなにたくさんの赤ちゃんがいるのか尋ねたそうです。

「この子たちはみんな駅やごみ箱の横に座布団にくるんで捨てられとったんよ」と答えが返ってきました。

これは私の母が子どもの頃（豊島の）神愛館を訪れた時の記憶です。何年かしてトタン屋根の家は立派な鉄筋コンクリートの建物になりました。

島の子どもたちは、小学校・中学校から離れた地区に住む子どもは、小学生はスクールバスで、中学生は自転車で通学します。ちょうど通学路の真ん中あたりにある神愛館は、晴れていればたくさんのおしめが屋上にはためいていました。

自分自身は進学、就職と一旦は島を離れたものの家庭の事情で島に戻り、導かれるように神愛館の働き人となりました。

神愛館ではほかの施設と同様、季節に応じて様々な行事が行われます。春は、中庭に植えられた満開の桜の下、地域の人たちの歌や踊りを楽しみながらお団子に舌づつみ。秋には、遠くから太鼓の音が聞こえてくると、やがて大勢のかき手と共に神愛館の前庭に太鼓台がやってきます。太鼓の音に驚いて泣きだす子もいれば、一緒になって太鼓をたたかせてもらう子も。年の瀬には地域の人たちと一緒に石臼と杵でぺったんぺったん餅つき。つきたてのお餅を丸めてはほおぱりました。正面横に植えられた大きな二本の針葉樹には、クリスマスが近づくとたくさんのオーナメントが飾られ、夜にはイルミネーションが輝きます。それは島の名物で、夜になると家族連れで見に来る島の人たちがたくさんいました。子どもたちが散歩に出れば「散歩に行つきょんな」と声をかけてくれる人、やさしいまなざしを向けて見守ってくれている地域の人たち。豊島で『神愛館の子』と言えば、それは『愛すべき守る存在』でした。

長い年月が経過し、老朽化や耐震などの問題に加え、交通・医療などの面で様々な課題があった神愛館は、2015年に乳児院と保育所の機能を有した複合施設として坂出の地で再出発をします。

戦後の食糧難や遺棄児の多かった時代から移転するその日まで、子どもたちにとって島全体が大きな家族であり、神愛館の歴史は豊島の歴史でもありました。

移転に際し様々な理由を理解しながらも島の住民会議で反対されたのは、島の歴史が奪われるような思いもあったからだと思っています。（後には了承し、送り出してくれて現在があります。）

島の人たちすべてが賀川豊彦の理念を知っていたわけではありませんが、島の人たちの言葉やまなざしは「いと小さき者のためにささげられたもの」でした。自分の故郷がその時代に応じて大きく豊かに用いられたことを誇りに思います。

時代に応じて神愛館に求められることも変わっていきますが、神愛館の歩みを多くの人が心に刻んでつないでいってほしいと願っています。

次号は育愛館にバトンをつながせていただきます。よろしくお願ひします。

「イエス団の輪っ」と題して、リレー形式での投稿です。理事・評議員の皆さまからお一人、一般職員は、各ブロックよりお一人ずつ寄稿して頂きました。

15回目にご投稿くださった皆様ありがとうございました。次回のバトン先に選ばれた施設の皆さまも、ご入選の程、よろしくお願ひいたします。



人物探訪

イエス団本部事務局

元職員 近藤孝子さん

近藤孝子

こんどうたかこ

<プロフィール・横顔>

獅子座

1950 年代のジョン・フォード監督の西部劇の自然美を愛する
1990 年「三大テノール競演・カラカラ浴場に月が古代を思う」に感動



イエス団は現在、2府5県で施設が活動し、39 の事業を開いています。2016 年の社会福祉法改正による社会福祉法人制度改革を機に社会福祉法人に社会の厳しい目が向けられるようになり、内部統制整備も求められるようになりました。イエス団も理事会・評議員会・経営会議といった会議体も整備しつつあるのが現状です。

それ以前、戦後の社会福祉事業法や児童福祉法が制定され、高度成長期にイエス団の事務局を一人で担ってくださったのが、今回お話を伺いした近藤孝子さんです。

近藤さんは旧賀川記念館の事務のお手伝いとして 1959 年にイエス団と関りが始まり 1964 年から本部事務局員として勤めされるようになりました。以来、2000 年 7 月末に退職されるまでの 36 年間、村山盛嗣先生と一緒に本部事務局を支え続けてくださいました。

今回は、テーマを絞らず、自由に会話する中で当時の思い出話や歴代理事長のこと、各施設のことなどを神谷羊子さん(みなべ愛之園こども園園長)保野恵子さん(友愛幼稚園園長)と黒田(光の子保育園園長)でインタビューをいたしました。

イエス団に関わり始めたきっかけ

「一番初めはなんて言つたらいいのかな、旧の賀川記念館を建築するための募金事務」。ほとんど同じ時期に細川さん(祐村明さんのお姉さん)が本部の仕事をされていた。

イエス団教会の教員であった近藤さんに村山盛嗣牧師が「手伝って」と言われたのが手伝い始めたきっかけだったとのこと。

「『一緒にやって』って言われたからですか?」(黒田)

「そういう感じ…。というのはね、いつ正式なイエス団の職員になったのか、そういう記憶がないんですよね。変な話、例えば、園長先生だって私が園長になりますっていうそういう自覚っていうのは無い中でいつの間にか(園長になっていたの)違うかな?」

だから今のように何もかもが確立されてなかつたん違います?だからいろんなことが保育園にあっても、いつの間にか決められていたように思いますよ、元々イエス団の本部が職員の辞令を発行したなんていう記憶なんてないもの」

今から考えれば、ずい分ゆるい関係(?)なのでしょうが、意欲と熱意に溢れる人財が多くみられたことが想像できます。

賀川記念館の旧建物の竣工後に近藤さんは事務局に入られたことになります。それまで法人事務などの経験が一切なかった近藤さんだけに、ご苦労は大きかったことは容易に想像できます。



旧賀川記念館 (2008 年)

本部と施設

それぞれの施設に独自色があり、施設長に権限の大部分が任されていた時代でした。

「保育園、施設の独立性が強いから(独立性を尊重しているから)本部と施設の関わりは電話と紙だけでしたよ」

社会福祉法人ですから、当然理事会が決定機関となります。施設が少しずつ増えて、関係する行政も増える中で、課題も多くなり、それに対応するために常任委員会が組織され、集約し整理したものを理事会の審議に委ねるという体制となりました。

「形はどうなんかは知らないけれども、やっぱし村山(盛嗣)先生とか小川(居)先生や木村(量好)先生とか黒田(保郎)先生がいて、個性の強い人ばかりの集まりだった中でもなんとなくうまく行っているな、そういうふうなことは思いましたね」

「村山先生は持論を持っておられるから。(兵庫)県とか(神戸)市とか、まだ市の方とは比較的に良かったけど、県なんかとは村山先生の方も敬遠されてたけれども、県の方も敬遠したような存在であったみたい。でも最終的には村山先生は県に対しても市に対しても信用があったってことでしょうね。まあ、なんていうか、キリスト教の法人だし信用っていうのがあったのかな」

それぞれの市や府県で私立保育園全体の中心的な先生方がいて、話し合いをする中で法人の方向性を決めていた時代でした。

神戸市にあって賀川豊彦の始めた事業を継承している法人としてのイエス団の看板は大きな意味があったことが伺えます。幸い、今もその信頼は続いています。

事業報告。いろいろ

現在では、全施設の報告を一冊の冊子にした 200 ページを超える印刷物と決算書にまとめられていますが、近藤さんが在職中は、それぞれ施設で印刷したものを本部に送り、それを事務局で、黒紐で綴じて理事会に提出する。という作業をされていました。しかも印刷する用紙はまちまちで、A 版 B 版入り混じっての印刷物の山。

その時期の様子が話題になると「意外と場所がいってね」。笑って仰いますが、大混乱なのは想像に難くありません。

「みんなが期日を守ってくれたらいいけどね」(黒田)

「守るの守らないのっていうよりはね、守る気がないって」と笑って言われる。

「一番困ったのはね、繰越金とか次期に関係する違いがある時があって、『これが正しいんです』間違っていても、『(この数字が)できてるんだから、これでいいんです』なんて時もあったしね」



1980 年度の決算書類

ついで、混乱する決算事務の様子が伺われます。ただこれも次の川田公一事務局長の代になってより一層厳しく(というよりは、本来社会が求めている法人の姿になって、現在のような形に定着するようになりました。近藤さんの後を引き継いだのが歴代の事務局長である川田氏、馬場一郎氏、中田一夫氏、小野昌二氏の皆さんです。

「どんな人が書類を見ても、ちょっとした説明で全てのことが理解できるっていうような書類がいいと思いますよね」

現在は近藤さんが良いと思われるような書類になるよう、各施設長はじめ、本部事務局の皆さんは努力されています。

監査

「それでもね、一番すごいのは監査の書類はわからないし、なんでもいいからと言って土地・建物などの登記簿・謄本をいっぱい出しました。二回目も同様に提出しました」

「私たち監査って恐れるようなことをみんな言われるけれども、監査の意味はわからなかったのと同時に、あんまり書類があるようで、ないところもあって、質問されればね答えるけれどもね、こちらの方からね、ああです。こうです。という説明なんか私にはできなかったと思うんです。そういう意味ではなんというかのんびりしてたんだでしょう、だいぶん今と違ったんと違います?」

そんなことで監査が通るなんて今では考えられない時代と逆に感心させますが、個人的な信頼関係に裏打ちされた行政との関係性に助けられたことが伺われます。

定款変更

「施設が増えていくなか、その都度定款変更をしなければならず多くの時間を費やした。すうっと受理される時、もたもたと何度も書類を差し替える時など、今はどのような型になっているのか、これだけ多くの施設が増える中、事務局も大変だと思っています。」

震災前後

「震災の時はどうだったんですか」(黒田)

「震災の時はね、友愛幼稚園に、保母室(和室)がありました、そこで何日か泊まさせていただいた。そこが更衣室になっていたから、朝 7 時には保母さんが来るから、それまでに綺麗にしておかないといけない。瀬能さん(友愛幼稚園の事務)と掃除を何回か一緒にしました。河野さん(イエス団教会員)の家にも行ったりして、わりかた、震災でものすごく大変だったけれども、することの方が多かったから、しょげている間はなかった。事務所のロッカーが倒れてて紙類がバサーとなって、その紙類を整理して、乳児の部屋と前の管理員室のところに書類を置かせもらったりしてね。整理をしても書類がいっぱいありました。2 年程経ってからでしょうか、事務室は友愛幼稚園が使わなくてはならなくなったので、真愛ホームに移転。その作業はとても大変でした。私、震災の時の(黒田)信雄さん覚えてますよ。ほんとに一生懸命やっておられたから。あの時あなたの方がずっと大変だったと思う。吾妻小学校の講堂に居られた被災者の名簿作成。よく整理されたと思う」

歴代の理事長・常務理事のこと

1964年から2000年までの近藤さんの在職期間を調べてみると、賀川ハル先生(第2代 1960-1976)、金田弘義先生(第3代 1976-1980)、今井鎮雄先生(第4代 1980-2004)と3人の理事長先生の下で働かれてたことになります。常務理事は武内勝先生や金田先生、村山先生と錚々たるお名前があがります。特に深いのは今井先生との関係だったようです。

「今井先生はね、賢い人。一つ言つたら、全てを把握するっていうぐらいね。だから、ある面では厳しい人だと感じます。今井先生が目指された法人は、今のイエス団の組織・理事会の責任強化。かつては園長の権限が大きく、それだけまた園長の責任は大きいあり方を、本来の法人のあり方にしていく理事会の責任強化。しかし、イエス団の場合、多くが先ず施設があり、法人に加わった経緯、多い府県にまたがっていたのでなかなか進めなかった。」



賀川記念館開館式（2008年）前列左端に近藤さん

今井先生の身近に居て、今井先生の考え方聞く機会の多かった近藤さんの言葉だけに、重く受け止めました。

「ハル先生はどんな時でも姿勢を正しておられ、こちらからの問いかけには直ぐに応じて下さった。矜持を持っておられた方」

「金田先生の思い出の中に、バザーのお手伝いで、手の白い粉が顔にも付いていて思い出し笑いをしたのを懐かしく思い出します。本当に誠実な方でした」

「村山先生とは多くの時間、共にさせていただいたので、あり余る多くのことがあります。ある時、村山先生とある施設を訪問しました。会計報告にわからない点が多く、事情を聞くためでした。いろいろと説明がありました後、村山先生はありのままの会計報告・事実を報告してほしいと言われました。その後の施設の改善は早くなされました。これは事実の大切さ、原点にかえることの大切さを教えられた一例です。」

イエス団に望む事

「今、イエス団に望むことっていったら、あまりにもいろんな時代的な違いがありますが、今は戦争あり、貧困あり、飢餓あり、今望むことっていうのは、賀川先生が一所懸命生きてこられて、こういうふうにイエス団があるっていう中で、賀川先生の精神の実践です。賀川先生から始まって、いろんなことをされてきた方々の実践が今も生きますように。常にイエス団憲章に帰っていますように。」

「このまま時代が変わってもいろんなものが変わっても、繋がりというものが求められると思うし、私もそうあって欲しいな、なんて思います」と結ばれました。

困難な時代を過ごし、賀川精神の継承を常に考えてお勤めくださった近藤さんの言葉だけにその背後にある思いも受け止めつつ、今後のイエス団の働きを深めてゆきたいとの思いを強くしたインタビューでした。



左から神谷羊子さん、近藤孝子さん、黒田信雄さん、撮影：保野恵子さん

インタビューを終えて…

◆本当に久しぶりの再会でした。私自身が若い頃、お電話で色々な事を教えてもらった方で、頭が上がらなかつた記憶があります。今では法人内で色々な体制が整いつつありますが、根本的な部分での改革は道なかばではあります。過去の偉大な先生方が遺してくださいましたものを大切にしながらも、これから時代が求める法人の姿、社会福祉のあり方を創造するイエス団であつて欲しいと、近藤さんとのインタビューの中で随所に感じる事ができました。(黒田)

◆近藤さんには父の時代から大変お世話になり、父が倒れた後、1980年から代理で評議員会に出させていただき、右も左もわからない私を親切に受け入れてください、色々と教えていただきました。又旧園舎建築の際は和歌山県庁まできてくださいました。その頃は、今井理事長のもとで、村山(盛嗣)先生とか小川(居)先生や木村(量好)先生、黒田(保郎)先生方が侃々諤々と議論されており、今井先生は「最後は私が責任を取るから」と仰られていた様が思い出されます。それを近藤さんが記録を取りたり、当時はカップソーサーに入ったコーヒーなどを出してくださったり、スマートにしなやかに対応しておられ、おしゃれで素敵な大人の女性とあこがれておりました。時代は移り変わり、イエス団も随分整備されて来ていますが、賀川豊彦と共に生きた先達の方々の熱い思いを直接見聞きされて来られた近藤さんの思いをお聞きして、制度の縛りの中で如何にイエス団らしく懐深く、継承していくかを見出しが次世代の役割かと思いを新たにしました。(神谷)

◆近藤孝子さんには、いつもイエス団教会でお世話になっています。教会では、いろいろなお仕事を担ってくださっていて週報の発送作業をテキパキとこなし、常に教会全体や教會員一人ひとりに気を配ってくださっています。今もお変わりなく「凛とした女性」で本当に素敵なお方です。お話を聞かせていただいて、そんなこともあったのかと驚かされることもありましたが、イエス団を創り、育て、支えてこられた先生方の思いを受け継ぎ、イエス団としての繋がりを大切にしていきたいと改めて感じています。貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました。(保野)

トピックス

四貫島セツルメント・天使保育園 100周年記念を終えて

2025年10月に四貫島セツルメント・天使グループは創立100周年を迎えることができました。10月4日に記念礼拝と記念同窓会を日航ホテルで盛大に執り行うことができました。これまで事業を継続できたことは、本当に多くの方々に支えられ、また神さまに守られて歩んできた100年の重みを実感し、関係者の皆様には心から感謝申し上げます。

記念礼拝では平田理事から、小川居先生との楽しかった思い出や、イエスに倣って生きるとはどういうことかを示していただき、参加者の心に深く刻まれたことだと思います。

記念同窓会では、ガーデン天使前施設長の小川佐和子先生も無事出席できてご挨拶頂き、



大阪四貫島教会前牧師の水谷先生からは、小川居先生から頂いたというスーツを着て、先生への熱い想いを語っていただきました。

熟年OB達からも沢山の思い出話とメッセージをいただき、今も昔も変わらない天使魂のようなものを感じ、歴史の重みや、保育の楽しさ、人を大切にしてきた先代の想いなどバトンを受け取り、現役世代の私たちにとってこれから仕事の励みになりました。

この100年の間に5,100名を超える幼子達が巣立ち立派に成長して、学業に励み社会で貢献していることを嬉しく思います。

また保育士になって帰ってくる子や、介護士としてガーデン天使で活躍していることは、私たちの保育の励みとなります。

園舎も立派になり、制度も確立されて安定して運営していますが、土台はあくまでそこで働く人であり、支えてくれる人たちです。

多くの先人が礎となって今があることを再認識し、これから多くの方々に支えられ神さまに守られ感謝して、地域に貢献できるよう微力ながら新たな100年に向けて歩みたいと思います。

本当にありがとうございました。

天使保育園 園長 嶋田 良介

ぶどうの木保育園 創立50周年を迎えて

1975年4月1日京都府八幡市男山の地に、120名定員のぶどうの木保育園が誕生しました。当時八幡市の都市整備計画の中で、男山団地建設及びその計画に則った保育園や児童福祉施設の建設ラッシュとなっていた事を年表で見ることができます。

私たちの社会福祉法人イエス団は、賀川豊彦献身90年を記念して「イエス団憲章」を宣言し、更には2015年「ミッションステートメント2009」をイエス団の使命として掲げています。ぶどうの木保育園を含めたイエス団に連なる各施設は、先に挙げた憲章ならびにMS2009を念頭に置きながら、イエスの生き方に倣った施設としてあります。

当園には50年変わることのない普遍的なテーマとして「共に生き共に育つ」があり、それを土台として「礼拝」「散歩」「表現」「食」を保育の4本柱として大切にしています。キリスト教保育により、子ども、保護者、保育者が共に生き共に育ち合いながら、礼拝の中で命の尊さや平和について共に考え合い、育ち合っています。また、活動的な園生活の中でも、その子らしい表現をし、それぞれの表現の違いに気付き、認め合い、刺激し合ってより良い表現へと繋げていきたいと思っています。そして、ゆったり寛げる雰囲気の中で思い切り遊び込み、楽しんで食べて、ぐっすり眠ることが出来る環境を用意しています。「食う 寝る 遊ぶ」を実践する保育となります。

これらの保育も歴代の施設長、保育士の実践保育を継承する形で、私たちの今があると深く感じているところです。

MS2009の最後に掲げております、「わたしたちは、平和をつくりだす」このミッションを実践するかの様に、2005年から5歳児の子ども達は沖縄に向かい、沖縄の方々との協働のもと、様々な実体験をしています。ただこの様なことが実践できるのは、0歳児の頃から沖縄の文化、音楽、食、沖縄の方々との触れ合い、これらを可能とし許してくださる保護者の方々、並びに沖縄の方々の多大なるご理解とご協力があつて初めて成せることと実感しています。



大阪教育大学エイサー演舞　・　5歳児によるエイサー演舞

先日の50周年記念バザーでは雨の降る中、大勢の在園児、保護者の方々、卒園児、地域の方々がお越しになり大盛況となりました。

さらなる50年に向けて私たちは、誰と共に歩んでいくのかを常にここに留めながらイエスが歩んでこられた道を、子どもたち、保護者の方々、地域の方々、いと小さくされてきた方々と共に歩んで行きたいと思います。

ぶどうの木保育園 園長 木村 耕

トピックス

カムチャツカ半島巨大地震津波警報発表 を受けて（みなべ愛之園こども園）



日本時間 2025 年 7 月 30 日午前 8 時 25 分ごろにロシア・カムチャツカ半島付近で大地震（推定される地震の規模＝マグニチュード 8.7）があり、気象庁は同 9 時 40 分に北海道から紀伊半島にかけての太平洋側沿岸と伊豆・小笠原諸島に津波警報を発表しました。津波の到達時刻は午前 10 時～11 時半ごろ、当初「最大 1 m の津波」との発表でしたが、その後「最大 3 m」と想定を引き上げ、北海道から和歌山に至る広域で大津波警報が長時間継続しました。津波警報の発表を受け、県内各地の自治体では避難所を開設。防災無線やメールなどで、沿岸部から離れるよう呼びかけられました。

当日の様子

当日の最高気温は 34°C、天気は晴れ。5 歳児のプール参観の日でした。開催については、揺れのない遠地地震による津波警報であり、園が高台に位置し、到達予想時刻まで余裕があることから、予定通り実施する事にしました。

みなべ町においても防災無線によって避難の呼びかけが行われましたが、職員には落ち着いて子ども達が動搖しないように配慮しながら、保護者に引き渡すまでは安全安心を第一に保育をするよう伝えました。

津波到達予想時刻の 10 時 30 分過ぎ頃には数名の避難者が駐車場に入ってくる姿が確認されました。

また海岸近くにある南部小学校の学童保育所にも、夏休み保育中の児童 59 名と職員 13 名がいて、小学校指定の避難場所に一旦避難していたそうです。しかしその避難場所は山間の広場で、屋根もないような場所なので、園で受け入れ可能か？という問い合わせの電話がありました。その後、小学校の隣にある南部中学校からも、部活動に来ている生徒の避難を受け入れてくれないか？と連絡があり、もちろん可能ですと返事をし、受け入れ準備を始めました。幼児の食事は普段ホール兼ランチルームで行っていますが、各部屋で食事をするように変更し、ホールを開放しました。

程なくして、小学生が到着してホールに入ってもらいました。その後、中学生と教職員 84 名が到着し、図書スペースに待機してもらい、園児の食事が済んでから 2 歳児の部屋も中学生に開放しました。学童保育の小学生は自身のお弁当を持って来ていたのでそれを食べました。中学生は飲み物も持たずに避難して来ていた生徒も多数いました。熱中症の恐れもあるので町に飲み水とお昼時ということもあり、食べ物の供給を依頼し、希望者に水のペットボトルを配布しました。

中学生の食事は教職員が開いているスーパーを探して調達

されました。一般の方々には町から供給された水と保存食のパンを配布しました。

その時点での園内の避難者数は、小学生 59 名、中学生 74 名、小/中/学童保育/職員 39 名、図書館職員 4 名、一般的な親子など約 30 名の 206 名と、在園児/職員合わせて 153 名。その他にも駐車場内での車中避難者や備蓄倉庫周辺にも数十名の方が避難されていました。

津波警報発表後の周辺地域の状況は、JR 西日本は県沿岸部を走る紀勢線の和歌山市～新宮間で運転を見合わせし、金融機関の店舗が臨時休業となり、一部のコンビニエンスストアやスーパーなども休業していました。

避難者の状況

避難されてきた高齢者の中で気分が悪くなられた方や、小さな子どものお昼寝などには、和室に移動してもらうなどの対応をしました。また、発熱をしている方が 1 名避難者の中にいて、隔離するスペースがなかったので、なるべく端の方で横になって頂きました。

園児は参観終了後、連れて帰りますという方には帰って頂き、14 時の 1 号認定児のお迎えの時点では在園児は 90 名、職員は 31 名。中学校はお迎えを依頼するメールを送信したので、保護者が順次お迎えに来られ、玄関ではその対応もあり混雑しました。小学生も順次お迎えに来られ、17 時には在園児 25 名と職員 14 名となり落ち着きを取り戻しました。

課題と今後の対応

今回の津波は和歌山県内では実際には大きな被害をもたらさなかったものの、沿岸の避難所や道路は混雑し、猛暑の中で熱中症による搬送者も相次ぎました。揺れを伴わない「遠地津波」に対する対応は難しく、混乱と様々な課題が浮き彫りになりました。

災害用の安否確認システムは便利さを増しています。しかし、いつの時点で、何を保護者や職員に伝えるべきなのか、どんな回答を得る必要があるのかは吟味が必要であると感じたので、9 月の避難訓練の際に模擬訓練を行いました。

そして津波警報は 10 時間以上に及びました。具体的に課題だったことは、最終的に帰宅や待機をどう判断するか。それは、町担当課と連絡を取り合いながら決断するしかありませんでした。そのためには「人命最優先」を前提に、状況に応じたリスクの判断ができるように繰り返し訓練をしていくしかありません。

あわせて「津波の警報レベル別に応じた行動ルールの明文化/見直し」や「警報長期化や夏季避難に備えた暑さ対策」、「津波警報・注意報の違い等に関する研修」、「一般避難者やペットを連れてきている方、発熱者などへの避難誘導体制の明確化」などが挙げられます。

しかし今回のような揺れを伴わない津波警報に対しては、「ルール化と柔軟さ」のバランスが大切です。ルールを求める一方で、実際の現場では一律のルールでは限界があります。組織としては、判断根拠となる大まかな対応方針を明確にしつつも、現場が状況に応じて柔軟に判断できる体制を整えることが求められます。そのために必要なのは、やはり様々なシナリオを想定しての訓練だと思います。

今回は「遠地津波」という南海トラフ地震とは違う想定外のシナリオに直面した避難者と受入側の戸惑いと、準備の不十分さがあらわになりました。今回のように「揺れのない警報」、「長時間続く警報」、「複合災害下の避難」といった状況も前提シナリオに加え、より柔軟かつ現実的な BCP を町の担当課とともに構築していく必要があると感じました。

文責：みなべ愛之園こども園 副園長 升崎丈夫

表紙写真の解説



① 【天使保育園】

万博に行きました！様々な国の文化、自然、いのちに触れコロコロが満たされました

② 【二宮保育園】

竹馬の練習で「がんばれ！がんばれ！」と応援しながら乗れるように手伝っています

③ 【甲子園二葉幼稚園】

川遊び ちょっと冒険

④ 【のぞみ保育園】

「お月見うさぎが並んでる」

⑤ 【天使ベビーセンター】

大屋根リングはなかよしリング！世界中のみんなが仲良しにな～れ！！

⑥ 【港島児童館】

親子クラブでお月見あそびをしたよ

⑦ 【ガーデンロイ】

夏休みに子ども達と旅行を楽しみ、BBQをして美味しく食べました

NEW 施設長紹介

イエス団報 27号で施設長紹介のページを設けました。その後、新たに施設長に就任された方をご紹介します。

大阪ブロック

甲子園二葉幼稚園

黒田 あや（くろだ あや） 2025年度就任



イエス団との出会いは、甲子園二葉幼稚園卒園生で教員、職員として約10年所属。自然保育や病児保育、人、牛、野生動物との交流も経験し、「これも役立つ…はず！？」と自分に言い聞かせつつ、2025年4月からマネージメントに奮闘中。趣味はトレッキングと絵本。皆さんにお力をおかりしながら、心と力を尽くします。

編集後記

大阪・関西万博が開催された2025年は、戦後80年、阪神淡路大震災から30年を数える年でもありました。賀川豊彦の神戸での歩み、イエス団の歩みは1909年に始まりましたが、関東大震災の1923年、終戦の1945年、阪神淡路大震災の起きた1995年など、大きな出来事や節目がいくつもあったことだと思います。当時これらの出来事に遭遇した人々は何を思い法人、施設や自身の働きに従事されたのでしょうか。今号の人物探訪で阪神淡路大震災当時を含め36年にわたって本部事務局に勤務された近藤孝子さんがその思いを語ってくださったことに感謝いたします。半年にわたって日本で平和の内に行われた万博ですが、参加した各国・地域・団体などには、それぞれの歴史や文化、課題や問題があり、それを展示などで表現していました。今年1年を振り返っても、世界では様々な出来事がありました。またイエス団の各施設、そこで働く人たち、利用者の方々などにも、それぞれの歩みがありました。その歩みと、関わった人たちの思いをこのイエス団報30号に寄せてくださいましたことに感謝いたします。法人の組織・体制が新しくなり、多くの方々に支えられ、祈られて、歴史を刻んできましたが、今年も創立記念日（12月24日）にイエス団報第30号を発行することができる恵みに感謝するとともに、イエス団に連なる皆さんのご理解とご協力に感謝を申し上げます。

企画委員会広報チームチーフ 梅村新（一麦保育園 園長）